

「炭」と大井 ②



青木更吉氏の「嶺岡牧を歩く」から。

- ・岩本正倫が小金・佐倉と同じ時期に嶺岡でも炭焼きを推奨（牧内の木を切ることによって餌場や牛馬の憩いの場を確保）
- ・炭焼きの資金は幕府（野馬方役所）からの前金で支給
→安政元年～4年（1853～1857年）の記録では合計700両を前金で渡している。これには、大井の遠藤宇作（遠藤家8代目・安政2年に牧士触頭役）も関わっている。
- ・炭焼きの原木は「牧内」と天領内の「御林」の松・ナラ・クヌギ等
- ・柱木牧の入会地では近隣の村々で利害が対立発生
- ・嶺岡牧での炭は「白炭」「黒炭」「松炭」の3種
- ・文久2年（1862年）記録では大井で668俵を出荷（別表）

文久2年(1861年)「炭の生産」 「嶺岡牧を歩く」から



村名	白炭	松炭	黒炭	合計 (俵)
北風原村	1 4			14
平塚村	3 4 8	4 2 9	6 4	8 4 1
大井村	2 6 4	3 2 2	8 2	6 6 8
山田村	4 3 1	1 5 9	4 1	6 3 1
荒川村	2 3 3	2 5 8	5 2	5 4 3
平久里仲村	6 7	1 0 4	2 0	1 9 1
合計	1,357	1,272	259	2,888

幕府事業としての炭焼きの他にも農家の副業として炭を焼き、江戸で販売、
医を学ぶ学資にしたという田之輔(後の保里昭平)も事例もあり。

「炭焼き」の相場（白炭1俵当たり）

＊青木氏の「嶺岡を歩く」から 黒炭：9分2厘3毛（1俵当たり）



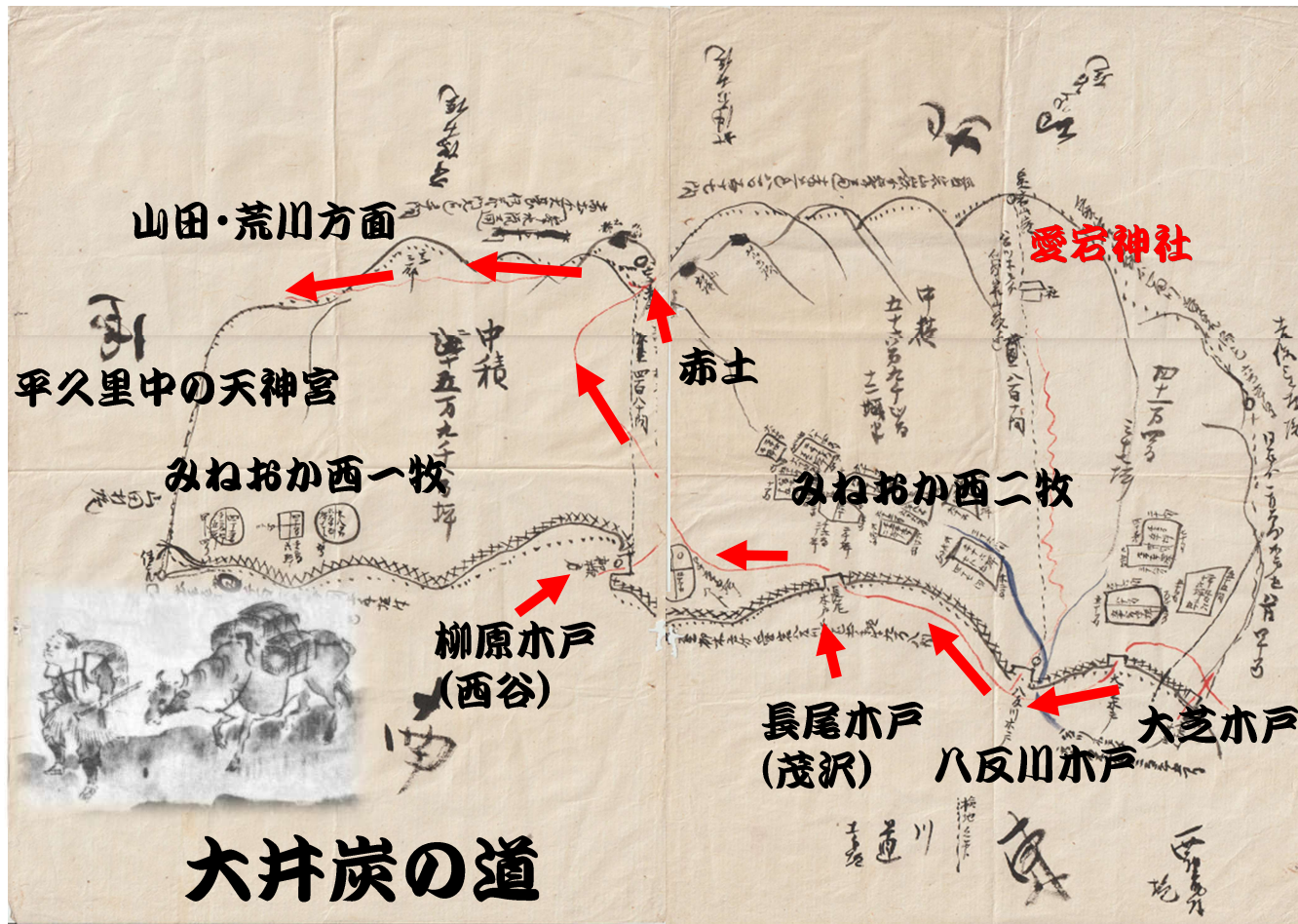
項目	費用
焼賃	6分3厘1毛
俵代	1分2厘
縄代	2厘
山出し・津出し賃（運送費）	4分5厘5毛
土場代（天神宮・高崎浦）	6厘
合計	銀1匁2分8厘6毛



大井では焼賃・俵代・縄代と天神宮までの運送費が支払われる計算
江戸中期の貨幣価値を1両：7.5万円とした場合、1両＝銀60匁で
銀1匁＝1,250円に相当、銀1分＝125円で計算すると1俵で1,200円
前後が地元に入ったと推測。（江戸時代は4進法と10進法・金・銀・銭の
3貨制度の組合せで、その価値も大きく変動している）

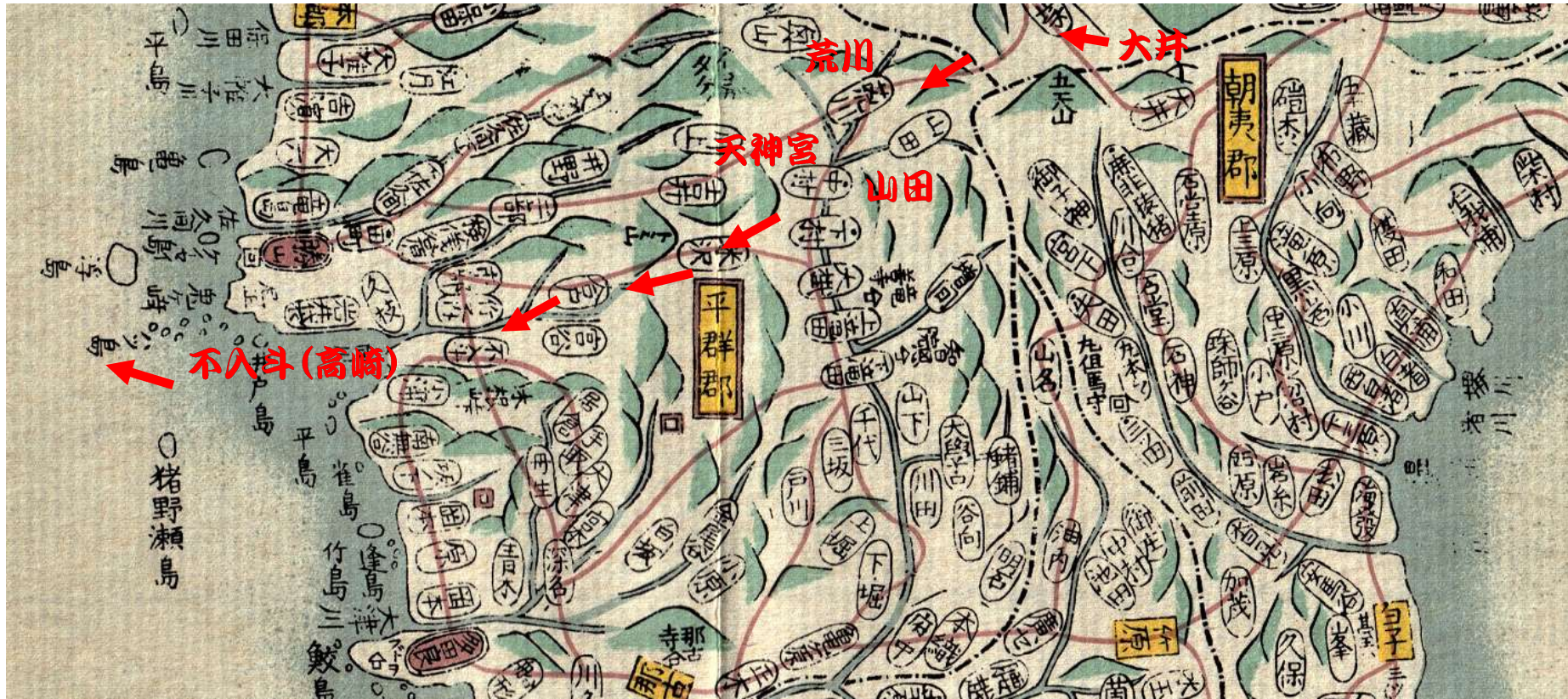
「炭の道」をたどる

「嶺岡牧を歩く」を参照に作成



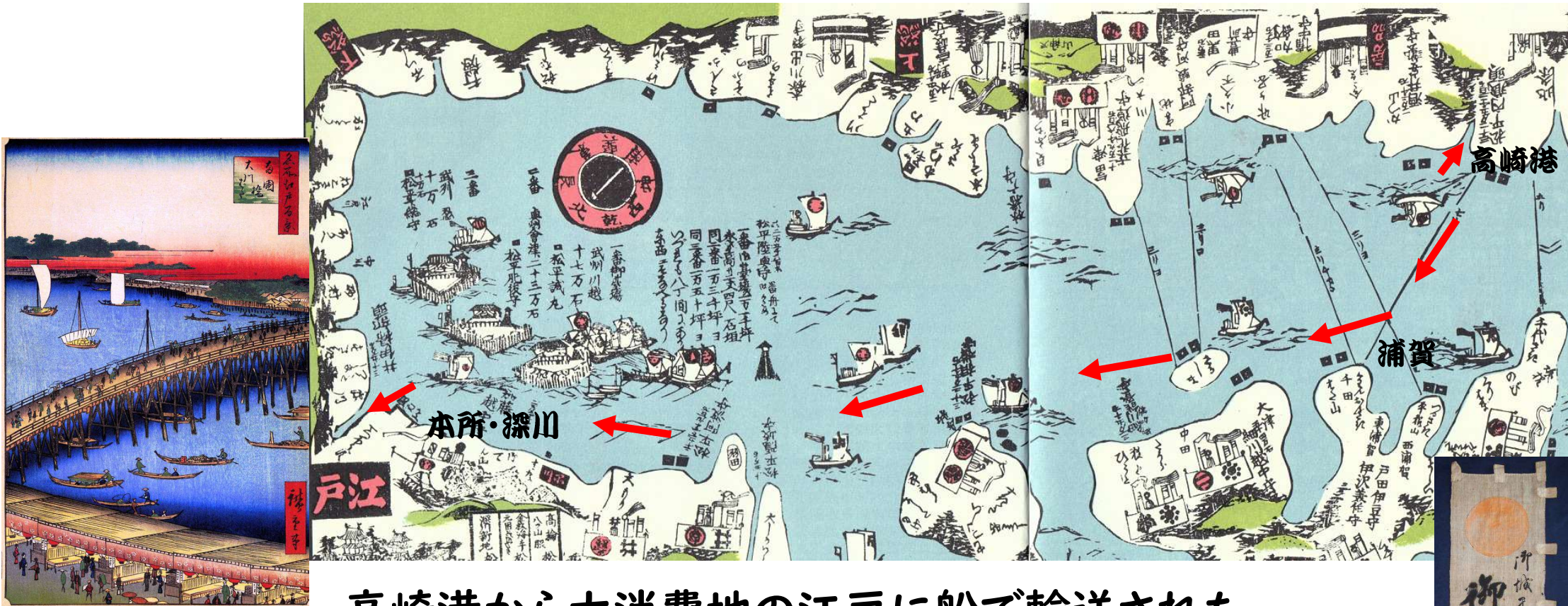
大井～平久里仲の天神宮
～高崎浦～御用船～江戸・
深川林町絹川屋
が大井で生産された炭の道
である。
大井からは、**長尾木戸**と**柳
原木戸**を入り、現嶺岡林道
の**赤土**を通り、荒川に抜け、
天神宮で集積されたと思わ
れる。
この炭の道は、牛を運んだ
陸路（長狭街道から戸面
原・君津から江戸）と共に
大井と外の世界を結ぶ道で
もあった。

「炭の道」天神宮から高崎港へ



平久里中・天神宮に集積された炭は高崎で船に積まれ(船主:三之亟)江戸本所・深川へ

「炭の道」御用船海上ルート



歌川広重の江戸
百景：両国橋付近

高崎港から大消費地の江戸に船で輸送された。
右写真は御城米運搬時の御用旗（館山博物館蔵）
享保6年（1721年）以降は浦賀奉行所で検査が必要（鮮魚を除く）



「炭の道」の終着点（本所・深川）

→ 浅草



大消費地の江戸で薪・炭問屋が集まっていたのが深川林2丁目で、伊勢屋万吉岸場で水揚げされ、嶺岡炭は御用商人の絹川屋源兵衛に届けられた。小金牧や佐倉牧関係では鴻池屋利兵衛・鴻池屋清兵衛・津国屋嘉兵衛等の記録が残っている。

参照：白井豊氏（歴史地理学2007）下総台地西部の牧とその周辺における薪炭林化―寛政期以降の変容―

林町2丁目

この近くには人情話や歌舞伎の題材にもなった「塩原多助」の炭屋もあった。愛馬の「あお」との別れの間は有名で、炭粉に海藻を混ぜた炭団（たどん）を発明し、豪商となった。積極的な社会貢献で戦前には教科書でも紹介された。



「炭」の持つ可能性と今日的意義



江戸時代とは異なる気候変動の時代にあって、
私たちが住む南房総・嶺岡地域での「炭」の歴史
から学べるものは多い。

特に、再生可能な資源である竹が荒れ放題になっている里山で「竹炭」として活用・温暖化ガスであるCO₂を炭素で固定化する事は、地下資源の削減と地球環境の向上につながる。

「炭」は水質・土壌改善や地域防災や景観向上を図る重要な柱です。
そして、「里山」からの環境問題に対する回答のひとつは・・・

「足るを知る」&「地球規模で考え、地域で行動する」です。

Think globally **A**ct locally **L**earn history